



TITLE:

塵芥集の研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

小林, 宏

CITATION:

小林, 宏. 塵芥集の研究. 京都大学, 1966, 法学博士

ISSUE DATE:

1966-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211745>

RIGHT:

【 12 】

氏 名	小 林 宏 こ ばやし ひろし
学 位 の 種 類	法 学 博 士
学 位 記 番 号	法 博 第 2 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	法 学 研 究 科 基 礎 法 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	塵芥集の研究
論文調査委員	(主 査) 教 授 猪 熊 兼 繁 教 授 於 保 不 二 雄 教 授 平 場 安 治

論 文 内 容 の 要 旨

この論文は、奥州守護職伊達植宗が天文5年（1536）に制定した法典「塵芥集」を日本法史の立場から研究したものである。

全四編で、その第一編の「序説」では、この「塵芥集」の名称について、数多くの中世諸般の文献から「塵芥」の用語の意味を検討し、奥州における伊達氏の文化を追求してその植宗時代の性格を論じ、現在の学界に行われているこの法典が「世事万般を規定した法典」であったという滝川政次郎説を批判して、塵芥が「過去の法令・判例・慣習」の意味であったと論じ、なおそれが公家的・文芸的なもので、この法典別称の「植宗様御家老御成敗式目」が武家的・法的であることに注目した。

第二編は「塵芥集の成立とその性格」で、この法典の効力に着眼し、その成立のあと6年を経た天文11年から同17年までの6年間の長い「伊達家天文の乱」という植宗・晴宗父子の争闘についてその経過を述べてその乱後の処分に及び、乱後成立した晴宗政権の性格を詳細に論考し、この乱がこの法典実施への反革命らしいとし、これを画期とする伊達家領国制発展過程論を批判して、却って植宗が伊達政権の権力構造の基盤を人的結合から地域性にまで止揚しようとして刑事裁判権と徴税権とを与えて設置した「惣成敗」こそ、この法典の担い手であったと論じている。これには第四編の関係資料を用いている。かくして、天文2年から同7年にわたる植宗の政策こそ画期的な伊達政権の発展で、その中心が塵芥集で、その編纂者、施行地域を明かにし、この法典は元亀元年（1570）まで効力があったと論考した。

第三編は「塵芥集の構造的特質」で、その法典としての形式と内容とに検討を加えてその構造的特質を論じ、その原由に及んでいる。この塵芥集の法典としての形式をまず幕府法の御成敗式目との継受関係に注目し、室町幕府法や他の国主の分国法のような式目の補充法的形態でなく、式目の形式ではありながら全く伊達家独自の法典であったことを究明し、さらにその内容の刑事法、身分法、担保法、土地法について他の分国法と比較検討してまたその独自性を指摘した。そして、かかる伊達立法の独自性の原由を追求し、奥州の地域性とその歴史性に及び、当時の奥州守護職が室町幕府の吏僚でなく、足利一門でない伊達

氏の伝統的な榮譽であったことから、この法典制定の意味を論考した。

第四編は「塵芥集の文献学的考察とその関係資料」で、文献学的にこの法典と御成敗式目とを校合し、検討し、この法典制定の参考に供した御成敗式目が武家系統の伝本であったことを論証し、当時盛行した清原宣賢の学派の学説に拠らなかったことを実証した。そして、塵芥集関係の資料として、天文7年の「御段銭古帳」と、同22年の「晴宗公采地下賜録」との未公刊文献に解説して考証を加えた。

なお、附録として、「最近の塵芥集研究について」と題したW・レールの独文「塵芥集研究」の紹介と批評とを加えている。

論文審査の結果の要旨

塵芥集は日本的な法典として171条という最大のものであるが、全条仮名書きで430年前の奥州方言をも交えたもので、かつて木島誠三などの論考はあったが充分ではなかった。

ところが、この論文は現存する諸本を校合、吟味した上に、さらに公刊、未公刊の関係資料をも調査、検討して、なお諸般の史実をも追求し、この法典の名称、成立過程、形式内容両面からの構造的性格を論考して、その効力にも及び、この法典が幕府式目や他国の分国法と異った伊達氏独自のものであり、その原由をも考究している。この業績によって、塵芥集は再評価され、今後の日本法史研究に重要な画期的発展をひらくであろう。

よって、この論文は法学博士の学位論文としての価値があるものと認める。